「あの人の道に迫る」　2023年08月07日

小説家の平野啓一郎氏が著した『死刑について』に感銘と共感を受けたので、2022年8月22日、ホームページに感想を書いた。7月31日の「東京新聞」の連載「あの人の道に迫る」に「平野啓一郎　死刑廃止を訴える小説家」と題して、平野氏のインタビュー記事を掲載していた。平野氏のインタビューを紹介し、私の感想も書きたい。

死刑は、現在の世界の144ヶ国で、廃止または停止され、死刑廃止は世界の趨勢である。ＥＵ（欧州連合加盟国）には死刑制度があると、加盟できない。先進国と言われている国で、死刑制度を保持しているのは米国のある州と日本くらいである。日本では、約8割の人が「やむを得ない」と死刑制度を支持している。日本の死刑制度の支持率が高いのは「忠臣蔵」の仇討ち物語が大好きで、江戸時代までは仇討ちを果たさないと、武士ではないと言われた価値観があり、被害者の加害者への仇討ちは正当だという感情を引きずっているからではないかと思ってしまう。ちなみに、聖書も「人を打って死なせた者は必ず死ななければならない（出エジプト 21:12)」と、死刑を認めている。

平野氏は、犯罪で「生」そのものが全て失われてしまう被害者に対し、加害者の「生」は続く非対称的な関係から、被害者はあまりに気の毒で、死刑はあってもやむを得ないと考えていた。ところが、小説を書く中で「死刑制度はあるべきではない」と翻意するようになった。①殺人行為に対する嫌悪感を突き詰めていくと、殺人の禁止は人間社会の絶対的な規範であるべきなのに「これだけの犯罪をしたのだから」と例外的に国家による殺人を許容するのは間違いだと思うようになった。②一家四人の殺害事件で死刑宣告を受けた袴田巌さんは、検察の証拠の捏造が問題になっている。思い込み捜査が冤罪を生むことがある。ある日突然、無実なのに逮捕され、死刑判決を受け、処刑されることも起こり得る。③成育環境に恵まれない人による事件は、社会の問題として考える必要があり、「自己責任」として死刑にされることに矛盾がある。④凶悪犯罪者を死刑にして決着させる制度は、被害者に寄り添っているようだが、第三者が被害者の多面的な痛みを忘れてしまう制度になる。死刑存置派は多いが、死刑を望まない人もいる。⑤平野氏が最も主張したいことは「死刑を廃止することで、被害者のために何ができるかを考える道が開けるというのが私の考えです」という言葉である。犯罪の背後に何があったかに目を向ける優しさを浸透させることである。⑥共感能力は大切であるが、人権を感情面だけで捉えることは危険で、憲法で謳われた基本的人権に基づく教育の中で、死刑存廃の議論を深めることが重要である。今の社会は、犯罪者に対する差別や暴力には、歯止めが利かない状態になっている。悪者は懲らしめて当然という物語が多いが、悪とコミュニケーションする回路を開く発想が求められる。⑦死刑を廃止するには、世論だけでなく、政治決断が重要である。難民認定、性的少数者の権利擁護は、国際水準から取り残されている。米国も死刑廃止や執行停止している州が増えているが、結局は、米国が本気で死刑廃止に向かい、人権問題となった時、日本も追従するような、情けない話になるのでないか。⑧死刑を廃止すれば、終身刑となる。日常生活を送れる隔離された環境を整備する必要がある。

私の死刑廃止の根拠は、①死刑の存置によっても犯罪は減らない。②誤った裁判で、無実の人の命を奪う冤罪が起こる。③最も大事なことは、人権は誰からも侵されない天賦の権利で、国家といえども奪うことができないものである。④犯罪者は、生きて罪と向き合い、贖罪の人生を送るべきである。⑤日本国憲法は、戦争による殺人を犯さないと謳っている。この憲法は死刑制度を拒否している。